

早瀬保子・大淵寛編

『世界主要国・地域の人口問題』（人口学ライブラリー 8）

原書房, 2010年9月, 308p.

世界各地域に特有の人口問題を、一般の読者にもわかりやすく紹介した日本語の文献は意外に少ない。多くの書物は、少子化や人口爆発等、同じ課題に取り組む国のみを対象としている。本書の特徴は、世界の主要地域や国の人口に関わる問題を地域横断的に網羅している点にある。出生力転換や死亡率低下等の人口変動を踏まえつつ、農村から都市への労働移動、外国人労働者の雇用問題、乳幼児死亡率の高さ、エイズの蔓延、若年出生率の高さ、家族政策の役割、経済の混乱と社会的不安定化に起因する死亡率の上昇など、世界各地域特有の人口にかかわる問題を11章にわけて紹介している。

第1章「21世紀世界の人口と開発：地域的接近」（大淵寛）では、世界主要地域の人口動向、及び人口と経済の関係を長期的視点から展望し本書の導入部分を成している。第2章「中国：人口政策と少子高齢化」（尹豪）では、中国の人口政策と人口動向に焦点をあて、急激な高齢化と出生性比の問題、農村から都市への労働移動と都市での戸籍の有無による差別について論じている。第3章「東アジア：少子高齢化と政策対応」（佐々井司）は、東アジアにおける低出生率の背景、そして少子化対策・外国人雇用政策について紹介している。第4章「東南アジア：発展の中の人口問題」（新田目夏実）は、「低開発段階の人口問題」と「先進国の人口問題」を抱える国とが並存しており、同じ東南アジアでも問題の性質が複雑化していることを示している。第5章「インド・南アジア：人口転換の進行と社会経済発展」（西川由比子）では、南アジア地域において人口転換が進行しつつあり、インドでは人口ボーナスを利用出来る時期に入りつつあることが示される。第6章「中東・北アフリカ：イスラームと人口」（小島宏）は、主として中東・北アフリカ地域におけるイスラームが人口動態に与える影響について考察している。第7章「アフリカ：高出生力とHIV/エイズ」（早瀬保子）では、サハラ以南アフリカに焦点を当て、高い出生力や乳幼児死亡率に加えてエイズの影響も深刻であるにもかかわらず、国際的な支援が縮小している厳しい現状を紹介している。第8章「ラテンアメリカ：国際人口移動と社会経済格差」（三澤健宏）ではラテンアメリカからの国際人口移動に主眼を置き、移動者による海外からの送金が送り出し国に与える影響、特に貧困及び所得再分配効果について考察している。第9章「北アメリカ：増え続ける人口と人種・エスニシティ・宗教」（是川夕、岩澤美帆）では、米国の比較的高い出生率・死亡率の背景に、特定の人種・エスニシティの高い若年出生率や死亡率があることを指摘する。第10章「ヨーロッパ：人口の減少・高齢化と低出生力のゆくえ」（福田節也）では、ヨーロッパにみられる出生力の差と家族・ジェンダー政策の関係について論じている。第11章「ロシア：人口の現状と未来」（トゥルヒーン・ミハイル）では、ソ連崩壊後の政治・経済・社会状況の混乱を背景に、出生率の低下・死亡率の上昇から人口減少に直面している現状を浮き彫りにしている。

私達日本人にとって、人口問題といえば、世界でも類をみない早さで進む高齢化と長期にわたる人口置き換え水準以下の低出生力であろう。一方、世界に目を転じれば、1960年代に観察された人口の爆発的な増加は一段落したものの、現在においても人口転換を終えていない国も多々ある。21世紀に入った現在、世界の人口問題は多様性を増しており、人口増加、人口減少、両極端の問題が並存する時代に突入したと言える。しかも、主要地域をミクロな視点でみてみれば、更にその地域の歴史や政治体制、経済・社会状況や文化に深く根ざす複雑な問題が潜んでいることに気づかされる。本書は、人口問題の多様さを俯瞰してみるためにも、特に人口学に初めてふれる人や学生にお奨めしたい1冊である。（千年よしみ）